

ロリTS娘とふたなり美
少女でなんかエロいや
っ

バリ茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

社会人になったばかりの頃にTSしちゃったTS娘と、大学の後輩だったふたなり美少女のスケベなお話 暇つぶしにどうぞ

ノクターンにも投稿してます

目次

一話	赤髪ロリT Sっ娘でオナホプレイ	1
二話	お昼食べる前にぶにぶにおてで シコらせて特濃ミルクを飲ませる	17
三話	チンポイライラ・キンタマぐつぐ	23
つ	———	———
幕間	お風呂で小休止	36
四話	お外でワンワン	44
五話	背面座位まったりえっち	55

一話 赤髪ロリTSっ娘でオナホプレイ

ある日、俺は女になった。

魔法の類とかそういうんじゃなくて、最近の流行り病とのことだ。

どっかの国の研究所からウイルスが漏れ出たとか、新しく発見された肉体変化型の病気だとか、いろいろな言われてるが詳しくは知らない。

分かっていることは、この病気は接触などをして感染するタイプの病気じゃあないってこと。空気感染もしない。

なら何で発症するのか——知らねえ。いまこの世界で起きてる現象は、最早ファンタジーの領域に足をつっ込んでいるのだから、俺に説明できるわけがない。

さて、遅くなったがそろそろ自己紹介といこう。

俺の名前は芽萐メスガ 霧男キリオ。

現代日本で社会人になったばかりの男だった。

大学を出て三流ブラック企業に就職したはいいものの、入社してようやくと半年が経

過したときに今回の病気を患ってしまい、まるで二次元から出てきたようなちっこい赤髪青目ロリになった結果、秒速で退職を余儀なくされた不幸なやつだ。かなしいぜ。

しかしお国からの特別な手当てとかがあつて、当分の生活には困らなくなった。

実家を飛び出て上京した身なので生活費には四苦八苦していたのだが、補助金のおかげでしばらくは安泰だ。

俺みたいに強制性転換、もといT Sした人間には手厚いサポートもされるみたいだし、いずれ仕事も見つかるだろう。

「ふっふっふ……来たぜ、温泉」

今の俺は比較的自由で、尚且つ女だ。

となれば今までやって見たかったことや、頭の中で『女になったら』なんて妄想していたときに考えていたことを実際にやることができる。

コスプレ配信してオタクたちをからかったりとかは、もうやった。いまやネットではちよつとした有名人だ。

ならば次は？

決まっている。

——温泉の女湯に突撃だ！

「いらつしやいませ〜」

「ぐへへ……あつ、タオル忘れた……。あのすいません、バスタオルの自販機どこつすか？」

「暖簾潜った先の脱衣所にございます〜」

「どっ」

ニヤニヤを隠せないまま『女』と書かれた暖簾の先へレッツゴー。

女になった俺だけど、中身は男のままだ。昔から変わることなく好きなのは女の子である。

小さい頃、母親に連れられて女湯に入った経験がある。

そこで目撃した見目麗しい若い女の人たちの肢体は、いまでも俺の記憶にとても鮮明に焼き付いている。

そう——あの時の幸福をもう一度！

今の俺は女だから大手を振って女湯に入れるのさ！ ふははーっ！

「うおおお……っ！」

脱衣所で感動した。右も左もマシユマロ・メロンのおっぱい・お尻。生きててよかったホントによかった。TS病万歳！！

「おっと、怪しまれないよう、早く中へ入ろう……」

若い人がよく来る温泉宿と、彼女らが入浴するだいたいの時間帯をリサーチしてからここに来た。

なので見たくもないおばあちゃんなどもほとんどいない。この温泉宿は若人ご用達の素晴らしい温泉なのだ。

「んしよつ、よいしよ」

女になってからなんとかかき集めた女としての無難な服を脱いでいく。Tシャツ、パーカー、ニーソと短パンだ。お胸が小ぶりなのでブラジャーとやらはまだ縁遠い存在である。

「よーし……いー」

ようやく桃彩の桃源郷へと入れる。もう自分の体を眺めて満足する、なんてことはしなくていいんだ。

安産型でお尻や太ももは多少むちつとしていているが、やはり女になったとはいえ自分の体。どうしてか自分では興奮することが出来ないのが悩みだった。

しかしそんな悩みともおさらば！ 俺は夢のパラダイスへと呐喊するぜえー！

「ちよつと、そこのアナタ」

「ふえっ?」

突入しようとした矢先、後ろから声を掛けられた。

振り返ってみれば、そこには艶やかな黒髪を湛えた和美人なお姉さんが。

「もしかして一人なの? お母さんは?」

明らかに子ども扱いされているが、この姿はではしようがないことだ。

しかし、そんなことより。

「あ、あはは……えと、オレ——わっ、わたし……」

上手く誤魔化そうとするが目が吸い寄せられる。

綺麗な黒髪もちろん魅力的なのだが、なによりバスタオルでも隠しきれないほどの豊満なおっぱいと、えっちな鎖骨や張りのある肌や太ももに頭がクラクラしてしまう。

美人だが、見た目からして年齢は高校生か大学生くらいだろうか。

なんだかどこかで見たとあるような顔の気もするが、思い出せないので多分気のせいだ。

ていうか顔がいい。これは……お近づきになるチャンスでは?

「ま、ママはパパと仲良しさんしてたから、一人で入りに来たの!」

これは、苦しいか……?

「そうなんだ。……ふふつ、いい子ね。じゃあお姉ちゃんが洗ってあげるから、一緒に入りましょうか」

「い、いいの?」

「いいわよ♪ さっ、行きましょ」

勝った! 第三部完!!

洗われるついでに身体の感触をたくさん楽しんでやるぜえーっ!!



私には一つ年上の先輩がいた。

知り合ったのは大学のサークルの新歓。

私にお酒を沢山飲ませようとする先輩たちが多い中で、彼は私を助けてくれた。

いや、私だけでは無い。サークルの一年生たち皆を上手にフォローしていて、尚且つ場の空気も乱さずに乗り切っていた。

それで惚れた訳じゃない。私は幼女趣味の変態だから、男の人に恋愛感情を抱くこと

はない。

しかし、どうしてか私は彼が気になってしまった。

もう少しだけ、彼のことを知ってみたいと思つてしまった。

以来、彼について色々調べた。そして分かった事は、彼は年上の女性が好みだという事。

清楚な感じが好み。それでいて包み込んでくれるような優しさがあるといい、という情報も仕入れた。

金色に染めていた髪を戻して、カラコンをやめてピアスも外した。

でも、私が自らを変えた時には、彼はもう卒業して就職してしまっていた。

それからいろいろ調べて分かった事は、彼が女の子になつてしまったという事。

それはつまり、いつの間にか私が内面に惚れ込んでしまつていた彼が、よりにもよつて私の性癖にドストライクな安産型のぷにロリになつてしまったということだ。

もはや自分を抑えることなど出来るワケがなかった。

生まれ持ったときから不要だと思つていた男性器の部分が、生まれて初めて爆発しそうな程にバキバキに勃起した。

ふたなりを隠して生きてきて、それに苦勞していた私だったが、中身どころか見た目

まで私の趣向にピッタリはまってくれた彼——いや彼女のキツキツであろう膺オナホを堪能できると思ったら、その瞬間今までの苦勞が報われた気がした。ふたなりでよかったですと思えるようになった。

彼のおかげで私の人生に光が差し込んだのだ。

「ふうー、いいお湯だったあ。ありがとうお姉さん！」

彼は——霧男さんは私のことを覚えていないようだけど、これから沢山思い出してもらうのだから問題ない。

「……ね、ねえ。お風呂上りに……何か飲み物、買つてあげようか？」

「ほんと!? よっしや……あ、いや、わ、わーい！ お姉さんだいすきー！」

あああああああヤバイ。ちよつと火照つた顔がめちやくちや可愛いし、サラサラな赤髪なんてもう口に含んで食べたいくらいだし、なにより着替えが半そでのシャツとちつちやい半ズボンで、体のラインがピツチり浮き出でてエロすぎる。

大変だ。つらい。なんとか勃起を我慢して作り笑いをするので精一杯だ。

「コーヒー牛乳でいいの?」

「うん。オ……わ、わたしコーヒー牛乳が好きだから」

ああー、やばい。金玉が煮えたぎつてきた。今すぐブチ犯したい。ロリぷにオナホに

したい。

顔が歪んだ笑みになりそうで危ない。

「あの……霧^{キリ}ちゃん？」

彼女の名前を呼ぶ。

霧男さんが自ら名乗った偽名を。

「なんですか？」

「霧ちゃんさえよければ、一緒にご飯を食べない？ ご馳走するわよ」

「えっ、いいの！ やったー！」

「ぐふっ……う、うん、いいよ。いっぱい食べようね……ぶひひっ」

……

……

……

なんかかんやあつて霧ちゃんを旅館の人気のない部屋へ連れ込んだ。

彼女は私が夕食に盛った睡眠薬でグッスリだ。

「んふふっ ♥ こうして抱っこしていると本当にオナホみたい……！」

誘惑しやがって、このっ！♡♡♡ おっ♡♡♡ んひいつ♡♡♡」

溺れるような充足感。

痺れるような快感。

そのすべてがチンポから脳に行きわたり、全身に快樂の波を届けて循環させてくれる。

「あああー出るっ♡♡♡ もう出るっ♡♡♡ とりあえず一発目出すっ♡♡♡ 孕めこの
メスガキっ、生意気な誘惑しやがってこのぶに口りいつ♡♡♡ はらめえええっ♡♡♡

♡♡♡」

びゆくんっ！！ ぶびゆるるるうっ♡♡♡ どぶっ、ぶびゆるるるううううっ♡♡♡

♡

「お、おっ♡♡♡♡♡♡♡ できゆっ♡♡♡♡♡♡♡ ションベンみてえにいつばいだすうっ♡♡♡

♡♡♡ わたしのミルク飲めっ♡♡♡♡♡♡♡ 膣で飲めっ♡♡♡ 中出し種付けっ♡♡♡♡♡♡♡

あああすきっ、好き♡♡♡♡♡♡♡ 霧ちやんっ♡♡♡ 先輩すきっ♡♡♡♡♡♡♡ 新歓の時からずつと

だいすきっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡ クツソ射精するからわたしの赤ちやん孕んでええっ♡♡♡♡♡♡♡

♡♡♡」

蛇口を全開にした水道の水みたいに沢山射精した。ドボドボって中に流し込んだ。先輩のことオナホみたいに抱き上げてぎゅううううって抱きしめながら一番奥に種付け

射精。濃いミルクをコキ捨てた。

「はああーっ……はあ……いっばい出た……」

「ん……？ あ、あれ？」

あっ、起きた。

「わひやつ!! なっ、なにこ」

うっさい騒ぐなチンポ啜えてろっ ♡♡♡

「んぐっうっ!!」

「あああゝ♪ あったかーい♡♡♡ 動かしますねっ、先輩っ♡♡♡」

本当にオナホみたいに霧ちやんの頭を動かす。

ねっとりとした唾液と熱い口腔内の感触が気持ち良すぎる。

「んぶツ♡ ぐぶうっ、んっ♡♡ んんうっ、おごっ♡」

「えいっ、えいっっ♡♡♡ だいすきです先輩っ♡♡♡♡♡ わたしのおちんぼしや

ぶって♡♡♡ これがわたしの愛情表現ですうっ♡♡♡♡♡」

もう限界が訪れた。

しかしこの日の為に沢山精子溜め込んできたいろいろなお薬も飲んできた。

十回出しても足りないだろうから、まだまだ遠慮せず射精していく。

「ほら先輩っ、おいでっ♪」

「わぷっ」

霧ちゃんのちいさなお顔を私の大きなおっぱいで挟み込んだ。

彼女の白皙の小さな手も胸のほうに引き寄せ、触らせるよう促す。

「最初は私が好きにしちやいましたから、先輩も私のおっぱいを乱暴に使っちゃってくださいっ♥♥♥ ちゅーちゅーしてもいいですし、もみもみしたり、乳首をつねったり引つ張ったりしても構いませんっ♥♥♥♥♥」

「っ！………うっ、う。——うわああああ!!」

「きやんっ♥♥ がつついちやって、かわいいなあっ♥♥♥」

頭を撫でながら、対面座位でにゅぷんつと挿入。

今度は霧ちゃんが蕩けた顔で小さくぱちゅんぱちゅんと腰を振っている。なんと愛らしい姿だろう。

「んちゅっ♥♥ ゆ、百合藤のおっぱいっ、おいしいっ♥♥♥」

「うっふふ……あんっ♥♥ ね、ねえ、先輩？ 名前で呼んでほしいですっ♥♥♥ 私の名前っ、霧乃きりのですからっ、霧ちゃんって♥♥♥」

奇しくも私たちの名前は似ていた。

私は彼女を先輩と呼ぶから、彼女には霧ちゃんを譲ろうと思う。

「くくっ！ 霧ちゃんっ ♥♥♥ 霧ちゃん霧ちゃん ♥♥♥ もっとおっぱい吸わせ
てえっ ♥♥♥♥」

「——っ ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥ ふ、ふふっ、ねえ、せーんぱいつ？」

必死な先輩を見ていたら、いたずら心に火が付いた。

私は浴衣から一枚の写真を取り出し、彼女にそれを見せつける。

「これなーんだっ♪」

「あつ……そ、それ、俺が男のときの……っ？」

「あーあ。先輩はこんなな凜々しくてカッコよかつたのに、今ではおっぱいに夢中な赤
ちゃん口りですわねっ ♥ 恥ずかしくないんですかあ？ ♥」

煽ると——先輩は目尻に涙を浮かべて、胸の中に顔を埋めた。

「い、いじわるしないでくれよお……！」

なんて可愛らしい生物なのだろうか。

もう彼女の腰振りではじれつたくてかなわない。今すぐ種付けする。この子を絶頂
させる。

「ごめんなさいっ ♥♥♥♥♥♥ ほら先輩、おっぱいちゅううううっしていいですから、泣かな
いでえー？ ♥♥♥♥♥」

「んひゃああつ ♥♥♥♥♥ あつ、う、うん ♥♥♥♥♥ んちゅっ ♥♥♥♥♥ ちゅぶっ ♥♥♥♥♥ おい

二話 お昼食べる前にぶにぶにおててでシコらせて特濃ミルクを飲ませる

あれから一週間が経過した。

俺は相変わらず自由気ままな生活を送っているが、一つだけ変わったことがある。

それは大学で先輩だった百合藤霧乃がよく家に来るようになったことだ。

あの温泉での一件があつて以降、彼女はかなり積極的に俺へ接してくるようになった。

霧乃は料理上手で家事万能の完璧超人みたいなハイスペックチート女子大生で、彼女の世話の甲斐もあつてか俺が一人暮らししているアパートの部屋は、溜め込んでいたゴミが消え去り冷蔵庫や箆笥の中などもとてもきれいになった。

ぶつちやけると女になってからは自堕落な生活ばかりしていたので、基本的な家事を霧乃が担当してくれることになって本当に助かっている。

というか、もはやほぼ住み込みの家政婦状態だ。同居人といつても過言じゃない。

最初はこつちも遠慮していたのだが、俺が心配だという一点張りな彼女に気圧された結果がこれである。あいつ強すぎる。

さて。そんなとても助かる存在になってくれた霧乃だが、彼女が俺の世話をするにあたって、交換条件として俺も彼女の世話をすることになった。

完璧超人な霧乃をわざわざ世話？ 不思議だろうが、俺の言っている世話とは世間一般で言うところの“世話”ではない。

俺がするのは『下のお世話』である。

「んおおおっほおっ♥♥♥ 先輩のぶにぶにおててぎもちいいっ!!」

現在時刻は昼前。たまには俺が昼飯を作ろうか、というところでエプロンを身に着けた瞬間に霧乃が興奮してナニをおっ立てやがった。

なのでリビングで、膝立ちをして正面から霧乃のチンポを扱っている。

「シコシコ……ふう、ちよつと手が疲れた」

「あああつ!! やつ、やだ! やめないで先輩っ!! いまめちやくちや気持ちいいんですう!」

「……ううつ。わ、わかった、わかったからほっぺにチンポ擦りつけないでくれ! つたく……んしょつ、んっ」

「おひよおっ♥♥ あっひぎいいっ! チンポ気持ちいいっ!♥♥ ちつちやい両手

でぶつといチンポしごかれるのさいっこおおおっ ♡♡♡♡

コイツうるせえな……。

ちなみに裸エプロンなんて恥ずかしい格好はしてない。

着てるのは部屋着用の薄手の半袖シャツと、男の頃に履いていたトランクスだ。トランクスは今の俺には丁度いいサイズの短パンなので、部屋着には最適である。

と、こんな風に確かに肌は腕や足を見せているものの、下半身は男物のパンツだしそこまで興奮する格好ではないはずなのだ。

だというのにエプロンを装着しただけでこの反応。まるで意味が分からん。

「な、なんか可愛くてっ！ 背のちっちゃい女の子がエプロンを着て料理するのって見て可愛らしいって思うじゃないですか！ そんな娘とエロいことできるって事実を再確認したらチンポが硬くなっちゃってえ!!」

「わかったわかったって！ 叫ばなくていいから!」

いくらこのアパートが曰く付きで他の住人がいなくて家賃がめちやくちや安いところとはいえ、真昼間から「おごお」とか「んひい」とか叫ばれるのは些か困ってしまう。

ここ一週間はずっと生活を支えられている立場なので、あまり強くは出られないのが悔しい……。

「ほ、ほら、もうご飯作りたいから早く射精しちゃえよ?」

「はひっ♥♥♥ わっ、わかりまじだっ♥♥♥ いっぱい出して落ち着きますから強めにゴシゴシしてえっ♥♥♥♥♥」

——シコシコっ♥♥♥♥♥ ぬちゅっ♥♥♥ シュツシュ、ニユチイっ♥♥♥♥♥

「おっおっう!?! おっおおっつおおおう!?!♥♥♥♥♥ ひっ、ひぐうううううっ!!♥♥♥♥♥」

びゅくんっ! ぶびゅるるる♥♥♥♥♥ どびゅるるるるっ♥♥♥♥♥

どちやつ! ボトボトツ!

「わぶっ! んぶえっ」

「はあああああであるでるっ♥♥♥♥♥ おしっこするみたいに射精してるっ♥♥♥♥♥ 先輩のかわいいロリ顔にぶっかけるうっ♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

まじでドン引きするくらい大量の精液が飛び出してきて、俺の顔に遠慮なくぶちまけやがった。

余程興奮していたのか、彼女が吐精したザーメンはプリップリのゼリーみたいな固形の白濁ミルクで、鼻や唇に沢山引つかかっている。すごい匂いで頭がクラクラしそうだ。

おかしいなあ。朝も寝込みを襲われて散々射精したはずなんだけどな。膣内射精じゃ飽き足らず口の中や髪にぶっかけて精液コーティングしやがったくせに、元気が有

るので、正直どつちもどつちだ。

「んんんっ……ちゅぼんっ」

「あはああっ……気持ちよかった♪ ねえねえ先輩っ、きんたまも舐め——」

「いい加減にしろっ」

昼食前だというのに流石に調子に乗りすぎなので、でっかいふたなりチンポの下にぶら下がってる金玉をデコピン。

「んゝゝおゝおゝおゝっ!!?」

性欲モンスターは蹲った。ぎまみろ。

「……ったく。また風呂入んなきやじゃねえか」

「んひっ、おあ……しゅ、しゅみません……おゝっ」

——というわけで本日二度目のシャワーとなった。

……のだが、懲りずに霧乃がお風呂場を覗きに来てオナニーをし始めたので、精液を飛ばされる前に風呂桶をぶん投げてワルモノを退治したのであった。

射精はしてた。

三話 チンポイライラ・キンタマぐつぐつ

——チンポがイライラする。

「おーい霧乃。洗濯物畳むの手伝ってくれー」

ブカブカのシャツからチラリと見える膨らみかけのちっばい。すべすべで綺麗な肩。私が譲ってあげた部屋着の短パンから伸びるちっちゃいおみ足。柔らかそうな太もも。ぷにぷににしてそうな足の裏。

ああ——チンポが無性にイライラする。

「クンクン……んん、お日様のいい香りだな。今日は晴れててよかった」

取り込んだ洗濯物……というか私のシャツを顔に押し当てて匂いを嗅いでいる先輩。

は？ なんだそれ？ 誘ってるのか？ 自分の匂いをシャツにこすり付けて独占欲アピールか？ かわいすぎだろブチ犯したくなってきた……。

「ふう、ふう……」

いや、あのね、困ってる。私は非常に困ってるのである。

今朝は彼女が寝ている布団に潜り込んで、そのまま力任せに寝バックして二発ほど種付けしたから収まりはついた。

しかしお昼はどうだ。あのシコイイカ腹をエプロンで隠して、お尻を振りながら鼻歌歌って料理しやがろうとしてたんだから此方が股間のアレをおつきくさせるのは当たり前ではないか。

だというのに先輩は手コキで済ませた。理不尽だ。

足りなかったから温かい口の中に突っ込んで残りのザーメンを吐き出したのはよかつたけど、きんたまは舐めてくれなかつたし、そのあとは無防備にシャワー浴びてたからオナニーしてただけなのに風呂桶で撃退されるし、私の鬱憤は溜まっていく一方だった。

はああああチンポがめっちゃイライラする。

竿の下のキンタマがグツグツ煮えたぎってて精液無限に製造してる。

クツソ劣情を煽りやがってこのぶにロリメスガキ。

チンポがガツガチに勃起してスカートを持ち上げてるじゃねえか。責任取れ。

「まだ午後の三時か。霧乃もなんかおやつ食べる？」

おやつはお前だ。ぶにぶにとやわらかそうなほっぺしやがってこのロリが。

「せーんぱいっ」

「うわっ。な、なんだよ、急に抱きついてきて……?」

「んーふふっ♪ ——ちゅっ、んちゅっ♥♥ はぶっ、じゅるるううう……」

「わひやあっ!?! なななにしてみっ!?!」

とりあえずほっぺを吸う。ロリの艶やかでモチモチの頬肉を口の中に吸い込んで、ムムムと唇で甘噛みしながら舌で舐め回す。

「んふふおっ♥♥ ふえんぱいのほっぺおいひいつ♥♥ んじゅるっ、ぺろぺろ……

ぢゅぶっ♥♥♥♥ るぶぶ……はあ、んれえぶ♥♥♥♥」

「ひいいい、急にどうしたんだよ……!?!」

先輩が私の股間に悪い刺激を与える生意気なメスガキなのが悪いんです。

ここは責任を持つてオナホになつてもらわないと困りますね。

「っふは! えへへ……」

「き、霧乃……? お、オレっ、なんか怒らせるようなことした……?」

は? 何をバカなことを……。

「私先輩を怒るなんてあり得ませんよ? 私は大学の新歓のときからずうーつと先

輩のこと大好きですもの」

「お、オレを……?」

「そうです! 先輩えっちすぎて下半身はムラムラしてイライラしてグツグツしますけ

ど、やつぱり先輩に対しては常に好き好きマックスです！　だーいすきですよー！」
ぎゆうーつとそのまま先輩を抱きしめる。

ちっこくて腕の中に納まる。かわいい。いい匂い。

なにより急にえっちな事されても私に対して気を使ったり心配してくれたりする先輩すき。やつぱり外も中も全部すき。

「とうわけで犯しますー！」

「……はえっ？」

先輩を布団の上に押し倒す。そして下半身の衣服を全て剥ぎ取り、その中心にある股間に顔を埋めた。

「ちよつ、き、霧乃お!？」

「いっつもおちんぼをペロペロして貰ってるから、今回は私がペロペロしてあげますねっ♥」

「ま、まって——んひゅうううっ♥♥」

え、なに？　まんこ舐めてるはずなのに甘い。ていうかいい匂いする。この人自分の体のケアは怠ってないのか。えらい。

はあぁ？　健気すぎん？　えっちだ……。

もつと舐めてやろ。

だが、まだお昼の三時だ。

この前買ってきたいろんなコスプレと、キンタマの中の精液は半分だけ夜まで取っておくことにしよう。

「ぐひひ……」

「んっ、あ……っ」

それはそれとして三時のおやつに先輩を食べます。やつべよだれ出てきた。

仰向けに寝ている先輩の恥部、その割れ目に怒張したチンポをあてがう。まずは正常位で。

「入れますよ〜」

「まつ……ちよ、ちよつとま——んぎいっ ♥♥♥」

「お、っ ♥♥♥♥♥ 先輩のおまんこきつつっ ♥♥♥ ぐねぐねしてチンポに絡みつくうっ ♥♥♥

♥♥♥ ふううおっ ♥♥♥♥♥」

私の太くて大きい剛剣が、先輩のきつきつな鞘に納刀された。とても満たされる感覚があつて心地良い。この先輩と一つになったときの充足感に勝るものなどこの世には存在しないだろう。

「ふひっ ♥♥♥ うごきますよっ!」

「いい、いっ ♥♥♥♥♥ あっあああっ ♥♥♥♥♥」

すぐさま腰をゆすつて抽挿を開始すると、先輩が軽すぎるせいかチンポの筋力で少しだけ体が持ちあがった。これじゃぶに穴だ。

「オ、アツ♥♥♥ せんぱい締めすぎっ♥♥♥ チンポをぜんぜん離してくれませんかええ？♥♥♥ おらッ♥♥♥ もつとチンポ味わえっ♥♥♥」

「おおあうツ、ああつ……おお♥♥♥ つ♥♥♥♥♥ おつ、おぐつ♥♥♥ おく突かれてえっ、つへあううっ♥♥♥♥♥」

腰を打ち付けるたびにビクンと反応してくれるのがたまらなく楽しい。

もう既に表情は蕩けきっていて、私の与える快感に感溺していることは明白だ。

「せんぱいチンポすぎっ♥♥♥♥♥ ふううっ♥♥♥♥♥ チンポ突っ込まれてこんな分かります♥♥♥ やっぱりセンパイはっ、おお♥♥♥ ツ♥♥♥♥♥ わたしのオナホです♥♥♥ええッ♥♥♥♥♥ おひっ♥♥♥♥♥」

「うあああッ♥♥♥♥♥ やっ、やらあッ♥♥♥♥♥ お♥♥♥♥♥ つ♥♥♥♥♥ お、おれはっ、オナホじゃなっ♥♥♥♥♥ んひいひいっ♥♥♥♥♥」

抵抗の意思が見られます！

無駄な理性です！ 即刻打ち砕いてください！ 早急に！

「んんいひいッ♥♥♥♥♥ おれっ、おれはああッ♥♥♥♥♥」

「うっせ♥♥♥♥♥ こんなギューギューにチンポ啜え込んでおいてオナホじゃないわけない

だろっ ♥♥♥ おっほッ ♥ みとめろっ ♥♥♥ オナホですって認めろ ♥♥♥ おらッ ♥♥♥

「あッ ♥♥♥ はああッ ♥♥♥ んんッ、ひああああッ ♥♥♥ みっ、認めるッ ♥♥♥ 認めますッ ♥♥♥ おれは霧ちやんのオナホですううッ ♥♥♥ んあああッ ♥♥♥」

強情だったがようやく落ちた。一安心だ。

これで今日の夜のコスプレ遊びもスムーズに事が運びそう。よかったあ。

「ほらっちゅーしましょうッ ♥♥♥ 大好きな先輩とべろちゅーしたいですうッ ♥♥♥ んっ、んぶあつれろおッ ♥♥♥」

「んむふうっ ♥♥♥ むぶちゅ、はみゆうっ ♥♥♥ れるれえろ……んぶあつ!

はあっ、はあ……♥♥♥

「はああおいしいっ ♥♥♥ 先輩のベロおいしっ ♥♥♥ 先輩も私とのキス好きですかっ? ♥♥♥」

「しゅ、しゅきっ ♥♥♥ しゅきいっ ♥♥♥ んぶっ、ちゅうううっ ♥♥♥」

「んふふふっ ♥♥♥ はあむっ、ちゅぴっ、れろれろれるうッ ♥♥♥ むぶっ、ちゅぱっ! はひっ、あひひひっ ♥♥♥ 先輩かわいすぎっ ♥♥♥ キスすれば絞まるし気持ちいいいっ ♥♥♥ チンポあつてよかったあ ♥♥♥」

眼下で悦ぶ先輩を見てたら射精したくなってきた。チンポをもつと気持ちよくした

くなった。

はやくこのちっこいおまんこの中にザーメンミルクぶち込んで妊娠させたい。孕ませたい。完全に私のものにしてしまいたい。

「ああー精液昇ってきた♡♡♡ ああっあ♡♡♡ チンポ気持ちよすぎて頭おかしくなりゅっ♡♡♡ おらっ膣締めろっ♡♡♡ ふんふんっ!!♡♡♡♡♡」

「んぎひいいいっ♡♡♡♡♡ あおっ、ほおっ、おっ♡♡♡♡♡」

そろそろ限界が近づいてきた。こうして先輩をオナホ扱いして支配欲を満たすのも心地良いが、なによりも最後は射精だ。ザーメンを流し込むことに意味がある。先輩を白濁色に染め上げて私のものにするのだ。

「おねだりっ♡♡♡ うぐっ、おほっ♡♡♡ おねだりしろっ♡♡♡ わたしの精液

おねだりしろっ♡♡♡ ザーメンくださいっ♡♡♡

「ひゃひいいいっ♡♡♡♡♡ くっ、くだしやいっ♡♡♡♡♡ なかにザーメンくださいっ♡♡♡♡♡ 種付けしてえっ♡♡♡♡♡」

「んひひひっ♡♡♡♡♡ よくできましたっ♡♡♡♡♡ それじゃあ三時のおやつにミルク飲ませてもらえますねっ♡♡♡♡♡ ほらっ、いただきますをしましょうねえっ♡♡♡♡♡ しろっ♡♡♡♡♡ してっ♡♡♡♡♡ 先輩してえっ♡♡♡♡♡ だいすきですからっ♡♡♡♡♡ してくれ

たらもっ♡♡♡♡♡と好きになりましたしゅからあああああっ♡♡♡♡♡」

太ももを掴んでいた手で彼女のシャツの中に手を突っ込み、指で思いつき乳首をつまみ上げた。

すると膣壁も万力の如く絞められて、私のチンポから精液を搾り取ろうとしてきた。とんだ淫乱オナホである。

お望み通り全部飲ませてあげようじゃないですか。

「いつ、いいいつ♡♡♡♡♡ いただきましゅうううつつ♡♡♡♡♡ いひいいつイああ♡♡♡♡♡」

「おおおお♡ おイク♡♡♡♡♡ チンポイクうツ♡♡♡♡♡ わたしの子種射精^でるううツ♡♡♡♡♡ ぶにぶにロリにツ♡♡♡♡♡ わたしのチンポ汁ぶちまけるツ♡♡♡♡♡ おいしいミルク飲ませちやうううううツ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

びゆくんっ!! ぶびゆるるるううううう♡♡♡♡♡
どぶっ、ぶびゆるるるううううう♡♡♡♡♡

「お♡ おお♡ おおお♡ おおツ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

びゆるっ、びゆっぶぶう……つつ♡♡♡♡♡
ぶぶっ、どぼぼ……つつ♡♡♡♡♡ ぶびっ♡♡♡♡♡

「んぎぎいっ♡♡♡♡♡ おっ、うおおっ、おっおツ♡♡♡♡♡ まだでるっ♡♡♡♡♡ キンタマ脈打ってるっ♡♡♡♡♡」

「んひっ、ふう、ふう……♥ いい子いい子……♪」
 「っ♪」

撫でると目を細めて喜ぶ。

やっぱり先輩は可愛い人だ。元からメスオナホの素質があつたのだろう。

「精液舐めとり終わつたらお風呂入つて、一緒にお昼寝でもしましょうか。夜は犬のお散歩がありますし、体力を残しておかなくちゃ」

「んふっ……う、うん♥」

「ちよつと激しくしちゃいましたね、ごめんなさい先輩。ほら、こつち来てください。ぎゅつてしてあげますから」

「わああ……♥♥」

子供みたいに抱きついてくる先輩。

「ちゅっ、んちゅっ♥ おっぱい、おっぱいいい♥」

そしてすぐさま私のおつきなおっぱいの突端にある桜色の乳首を口に含み、それこそ赤ちやんみたいにちゅーちゅー吸い始めた。乳房が大好きな男の子だった時の気持ちも忘れてないのか、女の子じゃやらないような激しい触り方でおっぱいも揉んでいる。

「よーしよし。私のおっぱいで遊んでいいですから、お風呂で綺麗になりましょうねー」

「うんっ……♪」

完全に甘えっ子モードだ。

おそらく先輩が正気に戻るのはお風呂を出たくらいだろうな——と思いつつ、身体の軽い先輩をひよいつと持ち上げて、私は風呂場へと向かっていったのだった。

……余談だが、お風呂ではおっぱいだけでなく、また怒張したチンポも吸ってもらった。

満足しました。

幕間 お風呂で小休止

というわけで先輩と一緒にお風呂に入ることになりました。

今はバスチェアに座りながら、霧ちゃん先輩のお背中を柔らかいタオルでゴシゴシします。

「かゆいところないですか〜?」

「……だいじょうぶ」

か細い声に戻ってきた。それは先ほどの様な甘えっ子モードではなく、理性があるという何よりの証拠だ。

実は霧ちゃん先輩、私が予想していたよりもはるかに早くマトモに戻ってしまったのだ。

「……霧乃さあ」

「なんです?」

「ちよつとは性欲を抑えられない? いきなりほっぺとか……あ、あそこか舐められると、こっちもビックリするっていうか」

でも喜んでたじゃないですか。

それにちやんとイってたし。

「そういう問題じゃねーって！ お前オレのことなんだと思ってるんだ！」

「んー……オナホ？」

「てめえな……」

「ウソ嘘じよーだんですよっ♪ やってる時も言いましたけど、私マジで誇張なしに先輩のこと大好きですからね？ 結婚します？」

「うっ……は、話が飛躍しすぎだったの……」

照れてる。かわいいくなんだこのちっこいの愛らしすぎねえかオイ。

……あーなんだろう。さっきめちやくちや射精したばかりなんだけど、こうして洗つてると霧ちやんの白くて綺麗な背中をガン見することになってまた興奮しちゃう。

「……うひっ」

バスチェアにちよこんって乗ってる小ぶりなお尻とか、照れながらそっぽ向いてるけど鏡に映ってるクリつとしたジト目なおめめとかホントかわいい。

「おっ……うほっ♥」

そっつと前を覗き込めば桜色のキュートな乳首と膨らみかけのおっぱいが見える。

——やっべ勃起してきた。こんな全身やわらかそうな口りをいつでも犯せるし触り

放題つて考えたら興奮が止まんねえ。

「……霧乃？」

「先輩。おちんぼ硬くなっちゃいました」

「は、はあ？ おま、さつきあんなに射精したばっかだろうが……！」

そんなこと言われても日常的にセックスできるメスオナホがいるって自覚したら興奮しちゃうに決まってるでしょ。

ていうか何だよ無防備に体を洗われやがって誘ってんのかメスガキ。

「スウ〜〜〜つ……んはあつ♥ 霧ちゃんほんといい匂いしますね。そうやって発情フェロモンまき散らしながら私のちんちんイライラさせて楽しいですか？」

「言いがかりが過ぎる……。そんなのお前が性欲ザルなだけ——あつ、こらー！」
体が軽いぶにロリをひよいっと持ち上げ、私の膝の上に乗せた。

硬く怒張したチンポが彼女の太ももにニルンっ♥ と挟まり、背筋がゾクゾクと震えた。

「おひっ♥ やわっこい太ももに挟まれるのチンポに効くう……♥」

「まーたこんなんでつかくして……抜かないと治まらない？」

「当たり前でしょ。ホラ、早くその太ももから飛び出てる私のカチカチおちんぼを両手で手コキしてください♥ しろっ♥」

「……まったく、しょうがないな」

「おっ♥」

命令したらその通りに、ぷにぷにの小っちゃいおててで、棍棒のように太く聳え立ったチンポを両手で握った。

指の腹や親指の付け根など、特に柔らかい部分がチンポに当たって気持ちいい。

「一回射精したらお風呂あがるからな？」

「いちいちうっさいですね早くしごいてくださいよ♥」

「こういうことになるが強気になるんだから……んっ、んしよっ」

にゅちっ♥ にゅこっ、にゅこ♥

「おっほ♥ ロリの手でチンポをシコられんの最高っ♥ でもこのままだと泡が沁みちゃいます先輩……」

「ボディソープだと後で痛くなっちゃうんだよな。泡は軽く洗い流してっ……つと。とりあえずベビローションにしとこうか」

手コキをより円滑にするために、霧ちちゃんは近くにあつたローションを手に垂らし、おててをニルニルにしてから再度チンポを包み込む。

非常にチンポのことをよく考えたケアだ。ボディソープでシコると後で鈴口が痛くなってしまうので、こうしてローションで優しく介護してくれると非常に助かる。

ニユルンっ♡ にゆるぶぶっ♡ くちゅ♡ にゅちゅっ♡

「つしよ……ん、どう？ 気持ちいい？」

「はひっ♡ 霧ちゃんの甘やかし手コキ安心感があって好きっ♡ もっと優しくしてっ♡」

「はいはい。よーよし、ちんちんぬるぬるしてて気持ちいいねー♡ いつでも手の中にビュビュって射精^だしていいからなー♡」

ぬちゅっ♡ にゆるっ、ちゅくっ♡ にゅこ、にゅこっ♡♡

「おっおっ♡ んほほっ♡ おっうっ♡♡ 指で輪っか作ってカリ首ぬるぬるするのがもぢっ♡ 竿の部分もぐにぐにっしてっ♡」

「(っ)を……(っ)うじや」

「ん、ぎいっ♡♡ そ、そこ強めに……おひよっ♡ んお、おうっ♡ 頼んだらなんでもやってくれんの最っ高っ♡♡」

白く細い指が太いチンポを上下しっつ、適度に裏筋や亀頭の先を軽く撫でてくれる。痺れるような快感ではなく、文字通りチンポだけが温泉に入っているような、安堵できるような心地よい快感だ。

「ロリおっぱい触っちゃお♡ それっ♡」

「んひゃっ！ も、もう……んあっ♡ 急にっ、乳首つまむなあ……っ♡♡」

「うるっせえ♥♥ オラッ!♥♥ 手止めんな♥♥ 乳首ぎゆうっ♥♥ って引っ張られても献身的に手コキ続けろっ♥♥」

「ああうっ♥♥ んおっ♥♥ や、やあ……っ♥♥」

乳首をクリクリされることで出てくる甘い声がキンタマに響く。このロリ感度高すぎなんだよふざけやがって弄ってくださいって言ってるようなもんじゃねえか。

「ま、まけないっ、からなあっ♥♥ んひっ♥♥ このっ、この♥♥」

「んおっほおおおおっ!♥♥ 両手で亀頭をクルクルすんのヤバっ♥♥ キンタマごぼ

ごぼするうっ♥♥ 調子乗りやがって♥♥ 乳首引っ張ってやる♥♥ おらあっ♥♥」

「お、っ♥♥ りや、りやめえええっ♥♥ お、ひいんっ♥♥」

負けじと此方も霧ちやんを責め立てるが、そろそろ限界が近づいてきた。

キンタマの中で再び煮だって製造された白濁ミルクが尿道を駆け巡ってグングンせり上がってくる。

別に風呂場だし汚れてもいいか——ということでも早速お漏らしすることに決めた。

「ひよひいっ♥♥ あううっ、き、霧乃のチンポがビクビクううっ♥♥ だせっ、だせえっ♥♥♥♥」

「ああ、あ、ううイイク!♥♥ やべっ♥♥♥♥ キンタマから昇ってきたドロドロな

——と、こんな一幕がお風呂では起こって。

その後はドロドロになつた汚れチンポをザーメンごとお掃除フェラさせて、お互いにキレイさっぱりしたあと風呂を出た。

夜は『お散歩』というお楽しみがあるため、体力を回復する意味合いも含めてお昼寝を決め込むことに。

霧ちゃんを後ろからぎゅつてする体勢で布団に入り、柔らかいお尻の感触に耐えられずちっばいを揉み揉みしながらチンポをケツに押し付けてパンツの中で射精しつつ、私たちは一時の休息へとしやれ込んだのだった。

四話 お外でワンワン

時刻は深夜の一時を回った頃。

現在俺は霧乃と一緒に公園へ訪れている。

夜風が少し冷たいものの、そもそも気温が高いというのもあつてあまり苦ではない。そう。こうして深夜の公園に来ること自体は、苦ではないのだ。

……問題は俺の“状況”にある。

「はい霧ちゃん先輩！ そろそろ上着のパーカーを脱ぎ脱ぎしましょうね〜♪」

心底楽しそうな笑顔の霧乃の手には紐のようなものが握られており、目で追っていけば分かる通りそのヒモは俺の首元——首輪に括り付けられていた。

リードというやつだ。犬を散歩に連れていく際、勝手にどこかへ行かないよう首にくっ付けておくアレだ。

ペットにしか使わないはずのリードが、俺の首に装着されている。

それはつまり――

「ほら早く脱いで。一緒に夜のお散歩を楽しみましょう?」

「……わかったから、急かすなって」

「急かしますよ♪ だって先輩をワンコにしてお散歩させることが出来るって考えただけで、涎と我慢汁が止まらないんですもんっ♥」

ウキウキといった擬音がよく似合いそうな様子の霧乃がグイッとリードを引っ張り、俺を無理やり自分のもとへ引き寄せた。

そして『ワンコ』という言葉通りに犬コスプレをしている俺を守っている最後の砦であるパーカーに手を掛ける霧乃。

息が荒いし、なによりスカートの中央が既に盛り上がってしまったている。

「はあはあっ♥ 先輩が脱がないなら私が脱がします♥ ふひひっ♥」

「んっ……ちよっ、勃起チンポをお腹に押しつけるのやめろ……!」

「おおっ♥ 霧ちゃんのロリロリしいイカ腹にチンポぐいぐいすんのきもちっ♥」

スカートの布越しに肉棒の硬さを感じる。彼女の屹立したご立派さまは俺のイカ腹(?)を突つついてて、今にも俺を蹂躪しようとしている意志をひしひしと実感できた。

「ひゃ〜♥ 霧ちゃんホントにえっちな格好っ♥」

「お前がさせたんだろ……」

「いつものお礼に何かしたといって言ったのは先輩じゃないですか♥」

「だからって……うう、恥ずかしい……」

俺の今の恰好は、布面積が心もとない極小の紐ビキニと、頭部には犬耳カチューシャ。それからお尻に『尻尾』が挿入されている。

入れるときはかなり苦戦したし、いまま若干お腹が張ってる感覚が抜けてない。

霧乃は俺からパーカーを剥ぎ取ると、今一度手綱を強く握りしめた。

「さっ、お散歩しましょっ！ ワンコちゃんっ♥」

「……わかった」

「——あれ？ 違うでしょ、先輩」

「にっ、ニヤニヤしやがってコイツう……っ！」

「……わ、わかりました……ワンっ♥」

「んふふ♪ それでいいのよ霧ワンコちゃんめっ♥ じゃ、さっそくお散歩開始♪」

いつも家事やらなにやらで世話になってるから、そのお礼がしたい——なんて言わなきゃよかったと、今になって後悔している。

久しぶりに再会した時に真っ先に薬を盛って中出しレイプを決めやがったふたなり

野郎だし、霧乃が変態なのは元から知ってたが……まさかここまでとは思わなかった。
ひ、紐ビキニの犬コスプレで深夜徘徊なんて……!

「はっ、はっ、はっ」

「ぶひひっ♥ 霧ちゃんったら本物の犬みたいな声出ちやつてるよ? やっぱ興奮しちやつてるんだ♥」

緊張と焦りで過呼吸になってるだけだったの。

お前ふざけんなよこれ誰かに見つかつたらその時点で人生終了なんだからな?

「まあ何かあっても私が養ってあげますから安心してください。それよりほら、もっと犬っぽくしなきゃめーですよ? お犬様が二足歩行なんてしますか?」

「だ、だつて四つん這いだと膝が痛いし……!」

「だから地面が土で柔らかい公園に来たんですよ? 何でもいいから四足歩行してくださいっ!」

調子に乗りすぎだコイツ。

でも逆らえない。今この状況で立場が上なのは明らかに霧乃だから。

俺は忠実に従うワン公になりきらないと駄目なんだ。

そうやって霧乃を満足させて、一刻も早く帰るために。

俺は四つん這いになり、公園をゆっくりと進み始めた。尻尾の入っているお尻が少しむず痒い。

「んふふふ……♡ 霧ちゃんつたら尻尾をフリフリしちやつて可愛い♡ そんなにお散歩できて嬉しかったの？」

我慢だ。たとえ心にもないことだろうと彼女の支配欲と充足感を満たすためには、従順なワンコを演じなければ。

「う、うれしいワン♡ 霧乃とおき——」

「霧ちゃん？」

「ぐっ……ぐっ、ご主人さまとお散歩できて、とってもうれしいワン♡」

「いい子だね♡ そんないい子な霧ちゃんには、そろそろおトイレさせてあげなきゃー！」

気分がノってきた霧乃に若干引つ張られる形で、俺は公園の隅にある茂みの方まで移動した。

おトイレ……うう、やらなきゃいけないのか……っ！

「はいっ、ここでおしっこしていいよ♡ ちゃんと茂みの草にマーキングしましょうねっ♪」

「ふっ、ふうっ、フワーっ♡」

紐パンの紐を解き、なんとかバランスを保ちながら片足を上げて——出し始めた。

「んふうっ♥ はっ、はっ……♥」

「シャアーツ♥ じよぼぼっ、シャババツ♥」

「おしっこ上手だねえ〜♥」

「わ、ワンっ♥」

放尿中の俺の頭を霧乃が撫でると、なぜか反射的に鳴き声をあげてしまった。すると背筋にゾクゾクと何かが走っていき、頭の中が痺れるような快感に支配された。

——悦んでしまっている。

犬のように扱われて、犬の様な行動までさせられているのに、霧乃に褒められたり頭を撫でられたりすると、不思議と幸せに感じてしまうのだ。

いつの間にか、俺は彼女に仕込まれてしまっていたらしい。自覚するには遅すぎた。

「わんっ、わおんっ♥ お、おしっこできたワンっ♥ ほめてほめてっ♥」

「ぐひひひ……はいっ、良い子良い子♥ 霧ちゃんほんとにお利口さんだねえ〜♥」

おしっこを出し終わって。

俺は霧乃の前に座り込んだ。

両足を開きながら座って、両手を胸の前で待機させる。

いわゆるエロ蹲踞ってやつかもしれない。

「はっ、ハッ♥ わんわんっ♥ ご主人さまあ♥ ワンっ♥」

舌を出して、息を荒くして、ハッハッと犬のような呼吸をしながらご主人様のご命令を待ちわびるエロ犬だ。

「くくくっ♥ ああっ、ダメ。もう我慢できないっ♥」

そんな俺の姿を見かねた霧乃は、スカートの下から怒張しきった巨大なチンポを露わにした。

「ハア——ッ♥ はっ、ハッ、はあっ……!♥」

彼女の往々しく逞しいチンポを前にして遂に発情しきってしまった、涎が出そうになつてしまふのを何とか堪えながら——

「スンスンッ♥ おひっ♥ ご主人様のおちんぼっ♥ いい匂いっクンクンっ♥
すうーっ、はあくくっ♥」

「おっおっおっ♥ このメス犬ったら発情しすぎだっつの♥ んおっ♥ チンポの臭い嗅がれんのキンタマに効くうくくっ♥ 待てっ♥ まだ待てだぞっ♥」

目の前で我慢汁を垂らしながらビクビクと脈打っているチンポを見せつけられて、我慢しろだなんてあまりにも酷な話だ。

「つらい、はやくチンポ欲しいっ♥ どうすればいいんだろう?♥」

「ほら霧ちゃんおねだりっ♥ 欲しいんだったらおねだりしなきゃダメでしょっ♥ ホ

ラ早くしろ♥ いやらしくチンポに媚びろっ♥♥ 自分が発情しきったマゾな雌犬だつて認めてチンポおねだりしろっ!♥♥

おねだり! おねだりすればいいんだっ!♥♥

「わっ、わんわんっ♥♥ き、霧はご主人様のチンポを嗅いで発情しちゃうっ淫乱でド変態な雌犬ですうっ♥♥ ご主人様の逞しいおチンポさまでっ♥ この性欲を制御できないマゾな雌犬を調教してくださいっ♥♥ ご主人さま専用の性処理メス犬オナホとして使ってくださいっ♥♥ わんわんっ♥♥」

「~~~~~っっっ!!! よしっ!!!」

許可がおりた——!

「わふんっ♥♥ ああ~~~~むっ!!♥♥ ぷちゅっ♥♥ んぼっじゅぶぶぶりゅれりゅううっ♥♥ ぐっぽぐっぽじゅるるうちゅぶぶびいっ♥♥ ぢゅるるっ♥♥ ぶच्चゅるじゅぶぐぼおっうううっ♥♥ れえろれろちゅっぷちゅるるううっ♥♥ おぐっぶぼお♥♥」

待ちわびていた瞬間だ。まるで一切の容赦もなく喉奥までチンポを頬張った。

チンポ全体を全力で味わうために舌をレロレロ♥と絡ませながら、頬肉を執拗にこすり付けてキャンディーのように舐めしゃぶっていく。

「お、っほおおお、オ、く、く、っ♡♡♡ 雌犬オナホペットにまだ精液ミルクのませりゆうううっ!♡♡♡」

「んんう、ーっ♡♡♡ おぐっ、ぐぶっ、うぐうううッ♡♡♡♡♡」

どっぶぶどぶぶっ♡♡♡♡ぶりゆるるう……♡♡♡どぼぶっ♡♡♡ぶびゅっ、びゅぶくううう……っ♡♡♡

……ここは野外だ。射精が終わって五分後くらいにようやく正気に戻ったのか、霧乃は俺の口からチュポんッ♡とチンポを引き抜き、ひよいつと俺を持ち上げて公園のトイレに駆け込んだ。

個室に入ったと同時に外からほんの少し話声が聞こえてきた。

「どうやらあと数分逃げ隠れるのが遅ければマジで人生が終了していたらしい。あんなだけ大声で絶頂すれば当然だ。」

だが、もうこれに懲りて野外プレイなんてしなくなるだろう——なんて希望的観測を抱きはしなかった。

なぜなら……

「はあっ、はあっ♡ 霧ちゃん便器の上に座って?♡ ワンコみたいに後ろからパンパ

ンしちやうからあ……っ ♡♡」

——こんな状況でも、霧乃は見事に興奮しているのだから。
まだ夜のお散歩は、終わりそうにない。

五話 背面座位まつたりえつち

霧乃がウチに来てからはや二カ月。

すっかり家政婦みたいになった霧乃は、完全に住み込みバイトのような形で家に居座っている。

もはや同棲と言っても過言ではないのかもしれない。

俺も最近は二人分の食事を作るのにもすっかり慣れた。

ただ、彼女との生活は少しばかり爛れていると思う。

「霧ちゃん。ただいま〜♪」

お昼ごろ。リビングで掃除機をかけていると、アパートの扉が開かれると共に声が聞こえてきた。

掃除機の音で聞こえづらかったものの、この家にノックもなしに入ってくるのは霧乃だけなので、すぐに彼女だと理解しそのまま掃除を続ける。

「ただいまー。……ただいまー！ ただいまってば！ 霧ちゃん!? 霧男せんぱーいっ!?」

無視を決め込んでいたら、涙目の霧乃が横から抱きついてきた。

季節は夏だ。掃除をする関係上ホコリを外に逃がすために窓を開けていて、冷房はつけていない。

端的に言うとう暑苦しい。

「先輩いい……いろいろ頑張つて午前中に全部終わらせてきたのお。褒めて♡」

「おかえり霧乃。邪魔だから離れてな」

「ひどい!?!」

「こいつはこんな感じで適当にあしらうくらいが丁度いいのだ。

まともにも相手をして疲れるだけである。」

「ねえ先輩? わたし教授の手伝いしながら前期の試験とレポートやってオープンキャンパスの諸々と図書館の書庫整理もやってたの。ほめて……?」

いやめちやくちや頑張つてたわこの子。褒めてあげなきや……。

最近帰りが遅かったり、随分とアレがご無沙汰なのも大学での活動が忙しかったからなのね。

俺は掃除機のスイッチを切つて床に置き、改めて霧乃のほうに向かい合つて彼女の頭を抱きしめた。

「よーしよし、霧乃はえらいなあ。よく頑張つたな? 褒めて遣わすぞ」

「先輩その時代劇みたいな言い回ししないで普通に褒めてえ……」
注文の多い奴だ。

とりあえずお疲れの霧乃をソファに座らせ、よく冷えた麦茶を注いだコップを彼女に渡した。

そんなでもって俺も隣に座る。

「ゴクゴク……んぷはあ！　ふうー……生き返るう。もうお外暑すぎてヤになっちゃいます」

「今日は天気もいいしな。……んっ、随分汗かいてるじゃないか。シャワー浴びる？」

「んーん。もうちよつと先輩とイチヤイチャしてから入るっ♪」

なんじゃそりゃ。汗かいたままじゃ居心地が悪いだろうに。

まあ気温の高さにやられてシャワーを浴びる気力すらも削がれちゃってる、って考えれば分からなくはないけど。

こんな暑い中でさつき聞いた沢山の活動……うん、霧乃はよく頑張ってるわ。

ストレスが溜まる前に、ここは同居人たるこの俺がしっかりケアしてやらんとな。

「霧乃、食欲はある？」

「……んー、あんまり」

「素麺くらいなら食べられそう？」

「あ、はいっ。冷えたものが食べたいなあ」

ならシヤワーが浴び終わる前までには作っておこう。

お掃除も一旦終わりにして、冷房つけて……そういえば昨日アイスを買ってきつた。霧乃が好きそうなやつも買ったし、お昼の後はそれを食べて、涼しい部屋でそのままお昼寝でも――

「ふふっ」

「霧乃?」

突然彼女が小さく笑った。なんだろうか。

「あ、いえ。……なんというか、こういうの良いなって」

「ん?」

「誰かと一緒に暮らすの、先輩とのコレが初めてなんですよ。子供のころから両親は海外を飛び回ってたし、家政婦さんも仕事が終わったらすぐ帰るしで……」

哀愁を感じる微笑を浮かべながら、霧乃はそつと俺の手を握る。

「いますつごく楽しいです。先輩との同居生活っ♪」

「霧乃……」

眩しい笑顔だ。俺の存在が彼女の支えになっていると思うと、こうして女の身体に

なってしまったのも、悪い事ばかりではないと思える。

……なんだけど。

「霧乃？ この雰囲気の中でチンポおつきくするのはおかしくない？」

「うっ。……ごめんさい」

横を見れば彼女のスカートがお山のように聳え立っていた。

「だ、だって最近忙しくて……その、我慢してたから……」

「……ハア」

「きつ、嫌いになりました!？」

「はい?」

そんなわけないだろ。

確かにエロいことする雰囲気ではなかったけど、オナニーすらできず多忙に追われてムラムラが溜まっていく感覚は、元男だからよく分かる。

こうして勃起してしまったのも、やるべき事を終わらせてから家に帰ってきたことで、緊張感が解けたからなのだろう。

むしろ勃起は健康の証だ。

おっ立ててくれて逆に俺はホッとしてるよ。

「霧乃の性欲処理だつて……まあ、不本意ながら俺の仕事だし」

「っ！ せ、先輩……それじゃあ……っ！」

「うん、いいよ？ でもこれからシャワー浴びてご飯だし、霧乃が疲れない範囲でな？」

「わーいっ!!」

許可するや否や、霧乃はスカートをたくし上げてパンツを脱ぎ、座ったまま勃起チンポを露出させた。

俺も部屋着のショーパーンを下着ごと脱ぐと、彼女は俺をひよいつと持ち上げて膝のうえに乗せた。

「あれっ。霧ちゃんも濡れてる？」

「……うっさい」

隆起した肉棒の先端を割れ目にあてがった霧乃が余計なことを言いやがった。だまりなさい。

「もしかして私に抱きつかれた時から、先輩つてば準備万端だったんです？ かわいい

♪」

「ああもうそれでいいから。早めに終わらせなさいよ」

「はーい。じゃあこのまま背面座位で……んんっ♥」

にゆぶんっ♡　つと俺の幼腔に肉棒が挿入される。こうなる前から期待していたせいなのか俺の雌穴は濡れそぼって、彼女の逸物を受け入れることに抵抗はなかった。

「んふああ♡　久しぶりの霧ちゃんなかの腔なか内なかきもちいい……っ♡」

「ふっ、んう……っ♡」

いつもの爆発するような性欲の昂りは見せず、まるで温泉に入ったときのような心地よさを声に出す霧乃。

えっちがしたい気持ちはあるものの、やはり肉体自体は少々疲れているようだ。

腰の動きも激しいピストンではなく、軽く揺さぶって俺の腔内をゆつたりと楽しんでいる。

「んふうっ♡……き、霧乃？　夏休みはいつからっ？♡」

「今日からですよ。よーやくお家でゆつくりできる……んおっ♡」

疲労であんまり動きたくないであろう霧乃を慮って、俺からも少し腰をグラインドさせる。

日常的な会話をしながら性行為に耽るなんて、一カ月前までの俺からしたら信じられないだろうが、この家ではコレが半ば当たり前と化していた。

……さすがに、ちよつと前にやったコスプレ外出は、あぶないから暫くやらないつもりだけど。

「おくおつ♥ 霧ちゃんが自分で動いてくれるの、すごい助かるう♥」

「んっ♥ ああつ♥ が、がんばった霧乃への、ご褒美、だっ♥」

「ほおっ♥ なにもしないでチンポだけ気持ちよくなるの最高っ♥」

悦んでくれたようで何よりだ。

——だが、久しぶりだからなのか、霧乃の限界はすぐに訪れた。

「ああ、くダメです先輩♥ もうイっちゃいますっ♥ もつと楽しみたいけどもう無理っ♥ キンタマに貯蔵されてた濃厚なドロドロ精液でちゃうっ♥ お、んほおっ♥

やっべ♥」

「ひぐうっ♥ あっ♥ はふっ♥ いっ、いいよ♥ このまま射精しちやっついていいからっ♥

夏休みのあいだはいつでもエッチできるからっ♥ 我慢しないで漏らしちゃえっ♥」

パンっ!♡♡ つと音が響くくらい強く腰を下ろした瞬間。

「無理〜っ♥ イグ〜っ♥ 射精るうっ♥ ぶっ濃い漏らすううっ♥」

「はーいっ♪ ご飯食べたらまたシマしようねっ♥」

ブポンツ♡ と音を立てながらチンポを蜜壺から引き抜いた霧乃は、そのまま浴室へ向かっていった。

当の俺はいまだにピクピクと痙攣したまま、ソファに横たわって動けないでいる。きつと下腹部のあそこからは白濁色の液体がトロトロ漏れ出ていることだろう。

「ふう、はあっ……ったく、相変わらずとんでもない量だ……♥」

食事前だからなのかお掃除フェラはさせてこなかったが、きつとご飯を食べた後の一番のあとにはやらせるんだろうな、なんて思いながらゆっくりと立ち上がり、俺はなんとかお昼ご飯の準備を進めるのだった。